

江戸雪歌集

『空白』

(砂子屋書房)

二〇一五年から二〇一九年の歌を収めた第七歌集。歌を二行に組むのも江戸の歌の息遣いに合っているようだ。

大阪城外堀沿いに立っているシロバナ
タンポポ イクサハオヤメ
降る前のおいの川だ上流は重い扉の
ように冷たく

射干の咲く坂のぼりゆき射干を呼び射
干はいのちのつよい花なり
「赤いやかん」「貴船へ」では、大阪、
京都の情景を詠んだ歌が収められている。
いずれも足元にある植物、川といった自然
に生命を見いだし、ときに人間社会への願
望を投じている歌である。

焼夷弾のようだとか花火をいう父に窓が
しずかに寄りそっている
白いミトンはめられている父の手がゆ
らゆらゆれて夜に漕ぎ出す

『空白』には亡くなった父が随所に登場
する。父と最後に過ごした最晩年の日常、
そしてその日常の中に登場する戦時下の記
憶が父の人生、生きた時代を思わせるもの
となっている。

(渋谷 美穂)

石川美南歌集

『体内飛行』

(短歌研究社)

「短歌研究」誌上の連作をそのまま所収。
初出時には、身体の一部をテーマにする、
直近のできごとを時系列で盛り込む、など
のルールを課したそう。それが内なるも
のを引き出すことになったようだ。

遠視性乱視かつ斜視勉強はできて球技
がすこぶる苦手
掻き壊す手を押し戻す意志なくて真冬
わたしにぼろぼろの首

など、身体的特徴ゆえの辛い体験が綴られ
る。その後、結婚、妊娠、出産と物語は続
いてゆく。

試着室に純白の渦作られてその中心に
飛び込めと言ふ
ぴんとこない暗喩のやうに浮かびある
エコー画面のできかけの人
予言の書の予言通りに今週は呼吸が浅
くなる足が攀る

知識として把握していた人生のステップ
が現実の形を伴って現れるときの驚き、そ
れは個人的であり普遍的である。恐々とし
かし直截に詩に昇華されてゆくシーン。そ
れが読みどころである。

(大松 達知)

小野市他編著

『小野市短歌フォーラム』記念講演集』

(短歌研究社)

書名は正確には「小野市詩歌文学賞 上
田三四二記念」が付く。上田は兵庫県小野
市出身。平成元年制定の「上田三四二賞」
から改称されながら続く短歌大会。その平
成十六年以降の講演録である。

単独講演、対談、鼎談など形態を固定し
てないが良い。歌人を中心に詩人・俳人
も登壇している。どの回も聴衆にわかりや
すく、具体例を挙げながら一般向けに話さ
れているのも良い。平易な言葉だからこそ
詩歌の要諦を突いているようだ。

例えば、第二十五回で、伊藤一彦は、短
歌は将来を予見する働きを持つべきだ、現
実の奥にあるものを歌うべきだ、ある瞬間
に絞って、しかも奥行きに過去や未来の多
くの時間が入り込むべきだ、などと簡潔に
述べる。高野公彦は宮柊二が短歌で時間を
詠む難しさをふと呟いたのをきっかけに短
歌の中で時間を詠むことを意識し始めたた
と言う。

自治体が牽引する文学的な取り組みは
人々の心を豊かにしてゆく。その記録の貴
重な一端である。

(大松 達知)